

---

**絶望の国と透明な未来。そんな言葉も嘘である。**

sur

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

絶望の国と透明な未来。 そんな言葉も嘘である。

### 【Nコード】

N0119I

### 【作者名】

sur

### 【あらすじ】

奥田正平はクラスメイトからいじめを受けていた。しかし、彼はそんな純粋で無知な彼らに怒りや恨みの感情を抱くことはなかった。救ってやろうと思う。彼は、このクラスを支配しようと決める。そして、クラスは絶望の国へと変わり、未来は何も見えずに虚ろなまま通り過ぎていく。

## 序章　ーハジマリー

9 / 1

とうとう僕の名前が消えました。前の席に座る佐藤が出席簿の僕の名前部分をボールペンでグジャグジャとやっています。そして、その横にひどく乱雑な字で虫と書きこみました。どうやら、僕の新しい名前は虫ということで決定したらしいです。これからは虫として生きていかなければいけません。下駄箱やロッカーもすでにやられています。今日という日を持って奥田正平という人物は存在しなくなりしました。この学校から。彼らの無邪気で純粋な心から。私は消え失せました。私は虫です。

虫に対してのクラスメイトの態度ときたら酷いものです。休み時間に、ただ座って本を読んでいる無害な私に向かって「キモイ」という言葉をぶつけてきます。ひそひそと話すように。直接僕に投げかけることはないのです。もちろん直接投げかけてくる奴もいます。それは僕の心臓を握りつぶして笑っているも同然の行為です。しかし、僕にとってはこんな奴らどうでもいいのです。彼らはその汚れを知らない純粋さ故に無知で、自分が物語の主人公だと思っています。ちよつと辛いことや悲しいことがあると、悲劇のヒロインの如く自分に酔い「私はなんて悲しい星の元に生まれてきたのだろう。ひどい環境に生まれてきたのだろう」と他人や環境の所為にして自分を奮い立たせ。少しでも良いことがあると、「これはドラマの始まりだわ！　きつと誰かが私を迎えに来て幸せにしてくれるのだわ！」と都合の良い妄想で勝手に幸せになるのです。特に、男なんていう生き物は本当に下衆で馬鹿な生き物ではないでしょうか。ただ、女にモテることしかステイタスを得られない。その輝く地位を得るために、安くて変なおいのする香水を降りかけ、女子の方をち

らちらと見ながらクラスの中での自分の存在感を出すために大声で会話をしたりと、変な方向で自分をアピールし、身内でしか通じないギャグや笑い話を、さも自分がこの世で一番面白いんだぜ！という風に教室で披露している。もちろんそれは冷静な目で見れば、とても恥ずかしくて、俗に言う”イタイ行為”なのですが。私は、こんな彼らと比べられるならまだ虫でいた方が良いでしょう。例えばそれが、どんなに孤独であろうと。学校生活において何も楽しみがないとしても。居場所がないとしても。私は彼らに傷つけられ本当の世界を知ってしまったのです。私はたった一つの、やらなければいけないことへの衝動に駆られていました。

結局彼らは、己の無知さに気がついていないだけなのです。そんな彼らに僕は怒りや恨みを抱くことはできません。どうしたら、何も知らない無邪気な子どもがやったことに対して親が恨みや怒りを抱くことが出来ましようか。それと同じなのです。僕は彼らを救ってやらねければいけません。ただ一人の聖者として。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0119i/>

---

絶望の国と透明な未来。そんな言葉も嘘である。

2010年10月11日11時29分発行